

菅江真澄翁と温泉

(その二)

児玉栄一郎

— 雄 勝 郡 —

川原毛温泉

本泉は雄勝郡東南部の山嶽地帯に自然湧出した温泉である。菅江真澄翁の『雪の出羽路(雄勝郡)』は、文化12年乙亥(1815年)翁が62歳のとき書かれたものようであるが、この山嶽地帯を踏破したのはその前年で、翁が61歳のときである。その三津川村の項では、

「古名優婆堂村也。三津川とは泥湯川、河原毛川、桑ノ沢川などの三瀬落会のゆゑをもて三津川ともいふ也。むかし奪衣婆像ありしといふ、みちのくにてはさうづ川とよぶ。三津川を黄泉(よみ)、三途川になずらえてより優婆堂をつくり、十王堂とてあらゆる仏たちをおしならべたて、又此十王堂の前に石ノ釈迦牟尼仏をすゑたり。」

と誌されている。

この真澄翁の記された三津川は現在、三途川と普通書かれ、部落も存在している。十王堂は部落の東端、道路の北側の小高い丘の上に現存している。十王堂の中には東壁から西壁にわたる長い祭壇があり、その上に丈が半米ばかりの奪衣婆を初め閻魔大王やもろもろの仏達が舞めくように押し並び、その奥に釈迦牟尼仏がまします。木造の十王堂は比較的新しく、よく保存されているところから考えると真澄以後いく度か建て代えられたものではなからうか。山門はないが杉と松がその役目をつとめている。

堂宇の前を通ずる道路の両側は絶壁となり、高松川が瀟々と岩走り、三川合して西流する。真澄翁の勝地臨毫には「十王堂ノ坂」と題する絵があり、羊腸なす坂道を降つて行つて高松川に架か

る木橋を渡り、再び九曲なす坂道を登るように描かれている。昭和41年頃まで此处には釣橋があつて、車で渡るときには揺れて肝を冷やしたものである。昭和42年には永久橋が立派に架け更えられて不安がなくなつた。

真澄翁は恐らくこの危い木橋を渡つて直接河原毛へ通ずる山路を辿られたと思うが、現在では川原毛温泉や泥湯温泉へ通ずる立派な道路が開発されているのである。勝地臨毫には新田村や大頸戸踰えの山道が描かれ、また高松ノ郷河原毛ノ山路のことが記されているから、翁は下新田から下ノ岱を通り、河原毛温泉へ行かれたものようである。

さて真澄翁の描き残された勝地臨毫のうち、河原毛温泉の挿絵をみると、一枚目には八万地獄谷、硫黄火煉舎、山神ノ社、白岳が描かれ、二枚目には川原毛温泉としての浴舎3棟、湯桁、滝ノ湯、湯ノ神、白砂山が描かれ、三枚目には大滝、目蓮母ノ地獄又目蓮湖、壘石、四枚目には硫黄堆、硫黄舎、山神社、血ノ池、寺跡、石経塚など、そして五枚目には焼山、硫黄堆、大釜、剣岳、笹森山が描かれている。

真澄翁がこれらの絵ならびに紀行をものされた当時から現在まですでに150有余年を経過している。いま川原毛の山に立つて地勢を眺めるとかなり変化のあつたことに気付く。その一つは硫黄採掘、道路開発によつて起つた丘の変化であつて、いわば人工的破壊に基くものである。その二は活動期の火山の自然的変貌であろう。もつとも真澄翁当時でさえすでに硫黄の採掘が行われていたことであるし、その後採掘が継続されていた訳ではなからうが、少なくともついで先日まで

某会社が硫黄を採掘していたのである。翁の絵の中に描かれている白岳といい、白砂山といい、焼山というのは恐らく同一のものであろうし、一木一草のないこの白岳は周囲の中高山地帯の深緑に囲まれて光り輝くばかりである。しかしこの白岳も両面東面からの硫黄採掘に遭い、昔の姿をとどめていないものと推定される。しかし現在も二、三中腹には噴気孔があり、殷々たる響きとともに毒気を吐き、あたりを黄に染めている。翁のいう大釜なるものは恐らく西方の山鼻にある噴気孔なるべく、現在でも轟々たる音をたててガスを噴いているが、泉源とはならない。浴舎といつても昔は小屋掛けであつたろうし、もちろん現在は無い。その他滝ノ湯、湯桁、もろもろの地獄、血ノ池や石経塚など不明であるが、供養塚だけは残り、石塔、石仏が立ち並んでいる。おそらくこの附近に寺があつたものと想像される。

現在川原毛で泉源は唯1ヶ所、湯尻沢川の北側に湧出している。明治19年版『日本鉱泉誌』には、位置景況として次のように書かれている

「此地ハ本村(須川村)ノ山間ニ在リテ泥湯鉱泉ヲ距ル殆ント二十町、西南ニ小山伏嶽、南西ニ川原毛嶽、東南ニ硫黄山アリ、北方僅ニ開豁ニシテ遙山ヲ望ム、海面ヨリ高キト凡チ七百六十三尺余ナリ、泉ハ溪流ノ東岸ヨリ涌出シ別ニ浴槽ヲ設ケズ、直ニ泉池ニ就キテ浴ス、毎年五月ニ至レバ仮屋ヲ泉傍ニ設ケテ浴客ヲ待シ、十月ヲ過レハ之ヲ撤ス」。

現在この泉源は溪流(湯滝または大滝となる以前、すなわち湯尻沢川の上流)の水面と殆んど同じなので、河水の混入を防ぐため石堰で保護してあるが、水嵩が増すと入湯が不可能となる。また浴舎とか仮屋など現在ないが、その近くには硫黄採掘当時の人夫住居用の仮小屋が建っている。

この泉源から川の downstream 50 m ばかりの個所に硫黄を析出する1泉源があるが、川岸で絶壁の下となる故行き難い、それに蒸気とか湯煙も立たないので温度があるものとは思われぬ。この溪流は岩石の間を奔流して下り、やがて湯滝となるのであるが、日本鉱泉誌には次のように書かれている。

「又此ヲ距ル北凡一町余大滝ト称スル一泉(高五丈、幅五尺許)アリ、断崖ノ石ヨリ奔注ス(無色透明、其反応ハ強酸性ニシテ且強酸味ヲ帯ブ、其温度ハ百零九度ヲ有セリ)此泉ハ初メ冷泉ナレトモ硫黄山ノ東辺ヲ回流シ温気発生ノ地ヲ経ルヲ以テ遂ニ温泉ト為ル」。

現在この湯滝と称する溪流には温度はないように思われる。但し昭和8年この地を訪れたときには、湯尻沢川が流れに沿つて温湯を噴き、湯気が立ち昇っていたことを思うと、ときに地殻の変動によつて熱気を帯び、湯滝が再び熱湯と変わるかも知れない。

真澄翁は大滝の頂で「湯滝なり、和良(けら)褰を着て病人の滝にうたるるをいふ、石の落ち来るがゆゑしきすとなむ」と誌してあるから、当時湯滝の滝水には温度があつたのかも知れない。滝壺附近の土地は狭い。滝は大小二条、その両側の岩には中程に岩窟があり、恐らく石仏を安置されていたように想像された。

西宮藤毅著『秋田県温泉のしるべ』(明治27年版)の内容はこの川原毛温泉に関する限り日本鉱泉誌と大差がなく、また秋田県警察部篇『秋田県鉱泉誌』(大正5年版)においても略同様であるが、多少の説明が加えられている。——硫黄山は多く硫黄明礬を出すこと、山の頂上に一窟があつてそこから噴騰する熱湯、熱ガスの高さ数丈そのため山谷鳴動し、飛ぶ禽はその上を翔けない世人これを祭門地獄というということである。

すでにのべたように焼山(硫黄山)には一窟も二窟もあつて蒸気とガスを噴出するが、熱湯の奔騰はない現在である。その祭門地獄のとどろく音について真澄翁は、

「硫黄山の鳴動のおとは雷にことならず、富士の鳴沢もかくやありつらむかし」と述べているがこの鳴動も日によつて異なるものではあるまいかと思われる。

なお山神社は前述硫黄採掘会社で立派に修復しているが、その裏方一段と高い猫額の地は寺院跡とおぼしく、石仏があまた立ち並んでいてあわれである。

近年硫黄会社は閉山となつたが、山菜採り、茸

狩りの地元民が来て露天風呂を楽しんでいるが、この硫黄山から泥湯温泉まで約2kmの距離であり、木地山、苔沼、禰太久良沼、更には小安温泉かけて良い散策コースとなつている。

泉質

塩類泉	(明 10)
酸性泉	(明 19)

須川岳温泉

本泉は雄勝郡の東雨端、岩手県に接する地域(須川岳または栗駒山麓)に湧出する温泉である。

この須川岳温泉の泉源は大体2カ所に分かれている。泉温が高く、湧出量も豊富な泉源は岩手県側にあり、その反対なものは秋田県にある。そして浴舎(ホテル)も県境線を眼前にして相對している。真澄翁が辿りついた頃にはもちろん県境について厳しい差別はなかつたものと思われる。

この須川岳温泉に関する真澄翁の文章は少なく心元ない次第であるが、絵に添えた備忘録または註といつた程度のものであるので、当時の情況と現状とを比較してみたいと思う。

まず最初に真澄翁はどの道を通つて須川岳温泉に到り着いたかということである。

つまり泥湯に続いているものは畠等(はたどうノ村名)の絵で、現在の畑等から中ノ台村へ東北進した模様である。この絵では八幡館、鷹鳥屋山(現在の高戸屋山)、高機山、そしてその次に生保内邑(現在の生内オボナイで、畠等の支郷)が出て来る。その次に兀然と檜山台、切留村が描かれているが、どの道を通つて山越えしたものでしょうか。恐らくは生内から生内峠を越え、東成瀬村に出、成瀬川沿いに菅ノ台村、檜山台に出たものとも思われるが、しかし檜山台村其二の絵では支郷切留村を描き、山神社を描き、其処から登る山道に生保内越を描いているので、生保内から直接高機山の山麓を通る杉道を通つたことを考えられるが、それが確かであるとも言えない。

次の絵は赤滝で、現在は高さ2mばかり、赤色の水が流れる訳ではない。次の仁郷は牧草地で

あるが、この辺から林相が変わり、高山植物が多くなる。

真澄翁の次の絵は駒形山である。この駒形山とは山容が馬に似たことから栗駒山(須川岳)ともいわれるが、絵の中には剣峯(現在の剣山)、大門長嶺、藤沼(現在不明であるが温泉地から秋田県側の朱沼へ下る途中の地域か、白浜あたりか)、朱砂泉(シュヌマ、現在の朱沼、または須川湖)、秣箇岳(現在の秣嶽)などが描かれている。また次の駒箇嶽の絵には酸河ノ温湯(すかわのいでゆ)、大日岩、湯神石、薬師仏、鶏岩、犬岩、獅子岩、蛭喰石、湯滝など描かれているが、このうち現在まで名を留めている岩は大日岩だけで、他は殆んど不明である。ただ泉源附近には奇岩怪石が多く、如何ように名付けても尽きることがない程である。

次の酸川嶽温湯の絵の中には湯飛泉(ゆだき、泉水は小高い石塊群の間から噴流するので、滝津瀬をなす)、一段川毒水の流れ、浴舎、湯桁などの他に判官水という飲料水を樋をもつて引水する有様など描かれている。現在選出する温湯は岩手県にあり、湧出量も多く、利用し切れない温湯は一段川となつて岩手県側に落ちて行くのであるが、途中温湯の触れる岩肌は勿論、泉池といい、川岸、河底といい、硫黄の湯花で黄白色に染められている。秋田県側にはこのような凄い出湯はなく、透明無色の微温湯はホテル前庭でも湧出しているが、量が少ない。入湯用の泉源は雨の谷間のものに求めているが、これも湧出量が少ない上に地表の変動で屢々泉源を更えたものようである。またこの地一帯に硫黄採掘による傷痕が生々しく、更に県境にまたがって褐鉄鉱採掘の跡さえ見られる。

温泉地から栗駒山頂上までは間近く、僅か4km程度で、途中泉源近く湯気山があり、登山道沿いに4カ所ばかり熱気を噴く場所があり、その上に箆を敷き寝て直接膚に蒸気をうけている。小屋の設けもあつて、これを「おいらん風呂」と称している。未利用の噴気孔もあつて藪の中に音を立てている。更に雨すると「天狗のお田」があつたり、お花畑があり、名残カ原と呼ばれている

。 広さは150×200mばかりである。 それ以後は山路となり、途中路の西側に火口湖がある。

この火口湖は昭和19年の噴火で誕生した湖で、湛えた湖水は青緑色に濁り、エメラルドのように美しい。 昭和湖の名がある。 真澄翁の項にはもちろん無かつたものであるが、更に登つて栗駒山頂上へ左折する処、すでに灌木地帯となるのであるが、其処の石室に駒形根ノ神が祭られていて、真澄翁も描かれている。 この辺はすでに陸奥の国栗原郡である。

なお前述お花畑からは道が岐れ、西進すると剣筒峯の下に出る。 柱状の長岩が並立して岩壁を作り、人を威圧するが、その麓には硫黄砂が流れて竜泉ヶ原の白浜が展けている。 此処から朱沼へ通じる路があり、大湿原を通ることになるが未だ開発されていない。

翻えつて温泉地から西進し、途中から南進すると白浜を経て朱沼へ出る。 朱沼も現在遊覧地化しているが、真澄当時夢想だにもしなかつたことであろう。 朱沼から更に下れば大湯沢を経て小安温泉に至るのである。 しかし朱沼から仁郷沢を溯ると前述の大湿原に至り、此処は高山植物の秘境ともいわれているが未開発である。

泉質

不詳

温 の 平 (仙 北 郡)

仙北郡神岡町(神宮寺町)の東南方には神宮寺嶽が聳えている。 円錐形の姿の佳い山(標高281m)で、誰の眼にもつく。 真澄翁の『月出羽道(仙北郡五)』には、この神宮寺嶽につい

て誌している。

「此神宮寺の嶽に属(づき)つらく山々多し、そがあらましを挙げて此処に云む。」とのべていわく、

○遙(よう)の森 ○神嶽(神宮寺嶽)、此山陰には ○鶴ヶ沢 ○蟹沢 ○殿内山 ○湯の平(ひら)(むかし温泉ありじといひ、今此比良によき寒泉涌ぬ ○笹の倉 ○烏帽子山 ○獅子鼻 ○腹(やせ)長根 ○鈎栗(おな)坂 ○姫神ノ嶽 ○牛の首 ○荒平 ○三森山 ○こもづつごえ、

そしてその続きに三泉、すなわち温泉比良清水、花小屋寒水、猪比良妙美井をあげて、「名だたる寒泉なれば此三泉を此処に挙る也」と結んでいる。

世は遷り、人は変わつて、真澄翁が此処にあげた山の名、または地名のうち、現在それと解かるものは神宮寺嶽と姫神山だけで、その他は土地の人々に訊ねても不明であり、況して名だたる三泉のことなど知っている人はない。 寒泉のことなど問うと、かえつて寒風山中腹の泉を指す始末である。

現在温泉として、または泉源として認められているものは、距離としてやや遠いが、雨外村湯神台の温泉があり、雷電山南方に地藏田の湯、また同山の東方には仁応寺の出湯などがある。 真澄翁の文章の勢いから考えて湯の平は神宮寺嶽そのものからあまり遠いものではなさそうに思える。

ただ神宮寺嶽と土筆森山とが成す沢で雄物川に臨む北ノ沢部落には自然湧出の井戸があり、飲料水に使用されているが、位置として山陰とはいわがたい。(訂正 湯の平は現存している)

以上